「仏説大東亜戦争」関連書籍

敏　翁

本ホームページにも掲載してある「仏説大東亜戦争」について、先日東芝材遊会・例会にて小講演を行ったが、　それに先立って会員諸兄にメールで関係する書籍の紹介をしている。
本掲載は、それをホームページ向きに加筆変更したものである。

この小講演で用いた Power Point (これも加筆あり)もご参考までにご覧に入れる。
(赤枠をクリックされたい)

以下、掲題に関し私が読んだものの中から主なものを紹介したい。

１．大東亜戦争の歴史的評価

発行順に紹介する。

①林房雄著『大東亜戦争肯定論』

『中央公論』に 1963 年から 65 年にかけて、16 回にわたりこの題名の論考を連載した。その後、1964-65 年に番町書房で正続 2 冊が刊行（のち全 1 巻）

林 房雄（はやし ふさお、1903 年（明治 36 年）5 月 30 日 - 1975 年（昭和 50 年）10 月 9 日）は、日本の小説家、文芸評論家。

1930 年 - 日本共産党への資金提供を理由に検挙。治安維持法違反で検挙。のち起訴され、豊多摩刑務所に入る。

1932 年 - 転向して出所。鎌倉に転入。『青年』発表。

「肯定論」の中心をなす主張は、幕末のペリー来航以来の日本近代史を、アジアを植民地化していた欧米諸国に対する反撃の歴史、「東亜百年戦争」と把握している点にある。そして、大東亜戦争こそはその全過程の帰結だった、としている。さらに、その過程（韓国併合、東南アジア進出など）における原動力は経済的要因ではなくナショナリズムであったとし、それの集中点は「武装した天皇制」だった、とも主張している。

いくつかの興味深いエピソードなどを例会当日紹介したが、ここでは省略する。
代わりに、質疑の中で大川周明が取り上げられ、更に堀会員から大川は縁者であるとの表明があったりした事から、本論とも関連が深いと思う本書の
第 12 章　昭和動乱の思想的背景―――大川周明と北一輝
を少し長いが(44 頁)、ご覧に入れたい。(赤枠をクリックされたい)
二人は、互いに相手を魔王(北の事)、須佐之男(大川)と呼び合っていたという。

②信夫清三郎著『「太平洋戦争」と「もう一つの太平洋戦争」
第二次大戦における日本と東南アジア』

勁草書房　1988 年発行　333 頁

信夫 清三郎（しのぶ せいざぶろう、1909 年 4 月 8 日 - 1992 年 10 月 10 日）は、日本の政治学者・歴史学者。日本政治学会理事長。名古屋大学名誉教授。

1934 年、九州帝国大学を卒業し、マルクス主義的な立場から在野で日本近代史の研究を行う。

唯物論研究会に所属し、1938 年には治安維持法違反容疑で、特別高等警察に逮捕されたこともある。

戦時中は「大東亜戦争が米英両国の世界支配から被支配民族を解放して、諸民族の自主的生活圏を建設しようとする民族解放のための戦争であり、その為の国際的な体制は、東亜においては、日満華三国の協力によって与えられ、世界的には日独伊の三国同盟によって与えられている」（昭和十七年五月『改造』誌掲載「日本外交研究の課題」）と主張した。

本書の「序」の初めのところを再掲する。

一九八六年九月、日本国際政治学会が開催した創立三〇周年記念の国際シンポジウム（アジア太平洋地域の国際関係 一九四五年～八五年） は、太平洋戦争（大東亜戦争） が東南アジアの民族運動にあたえた衝撃をめぐってはげしい論争をたたかわせたという。

私は出席しなかったが、学会理事長永井陽之助教授の紹介によれば、その経緯はつぎのようであった。

＜中国の近代化のみならず、東南アジアの脱植民地化の動向がひとつの不可避的な過程であるとしても、その過程に参加する行為主体の「意図」と「結果」の中間に錯雑なブラック・ ボックスがよこたわっている。 ……／特に太平洋戦争が東南アジアの民族主義に与えたイムパクト〔衝撃〕は、「意図せざる結果」の好例として活潑な論議をよびおこした。

日本の掲げた「大東亜共栄国」のデザイン〔設計〕の背後に、露骨な帝国主義的意図がかくされていたにもかかわらず、日本軍の占領は、旧白人支配層の威信を失墜させ、現地民族の占領行政への参加、青年の軍事訓練などを介して、現地の民族独立闘争を強化する結果となった（谷川栄彦九大教授報告）。 すくなくとも戦争と占領は、現地．の民族主義運動を"加速化” させる″ 触媒" の役割を果たした。

だが、この触媒説が、日本の侵略戦争を正当化する論理として韓国、東南アジアの一部参加者を刺戟した。これが誤解であることは明白としても、韓国併合に関する藤尾発言問題とからみあい、「太平洋戦争から日本人はいったい何を学んだのか」の声がフロア〔聴衆席〕から上がった。 われわれは、その反応を事実として真剣にうけとめる必要がある。＞ （朝日新聞 1986 年 9 月 16 日）

谷川教授の報告論文 （太平洋戦争と東南アジア民族独立運動） は、九州大学法学部の機関誌（法政研究）（第 53 巻第 3 号、1987 年 3 月）にいま載せてあるが本書は、国際政治史家としての谷川教授論文から刺戟を得た私が日本史家として問題ととりくんでみた報告である。

私が本書でとりあげた問題は、とくに三つある。

第一は、日本が組織を手がけたインド国民軍とビルマ独立義勇軍を戦史のなかにどう位置づけるかという問題であり、

第二は、日本の軍政が東南アジアにおける民族主義運動を加速させる触媒の役割を果したとすれば、それをいかにして果したかという問題であり、

第三は、大東亜会議とは何であったかという問題である。

(以下略)

それで目次は次の通りである。

第１章　大東亜共栄圏
第２章　大東亜戦争
第３章　アジアの戦争（ｉ．藤原機関とインド国民軍　２．南機関とビルマ独立義勇軍）
第４章　軍政と民族独立運動（１．ビルマとフィリピン　２．インドネシア）
第５章　大東亜会議

本書の最後の２頁ばかりを再録する。(赤枠をクリックされたい)
再録された文は、ディスプレイからはみ出して読み難い方は、shift + ctrl + “－” で左回転させれば読み易くなる筈なので試されたい。

育て上げたアウンサン将軍(スーチー女史の父)にも抗日運動に走られ、<大東亜共栄圏>活動は内部崩壊し、ポツダム宣言受託に至るのである。著者は淡々と記述しているが、行間から関係者(著者も含まれる？)の無念さがにじみ出ているように思えるのは私だけだろうか。

③細谷千博、本間長世、入江　昭、波多野澄雄編『太平洋戦争』

東京大学出版会　1993 年発行　669 頁
戦後 50 年を迎えて 1991 年 1 月に 4 日間にわたって開催された「山中湖会議」
(太平洋戦争の再考察――開戦 50 周年国際会議)を纏めたものである。
以下に目次を示すが、ここからも本会議が日米のみでなく、中国、ソ連、英連邦諸国、ドイツ、英国を加えた多数国関係の枠組の中で開戦過程をとらえる試みがなされている事が分かる。

目 次

はしがきー細谷千博
日米開戦の国際的文脈
開戦過程の再検討
開戦過程における陸軍-----波多野澄雄
日本陸軍の新秩構想と開戦決定----- マイゲル・Ａ・バーンハート.
日米開戦と中国
日米開戦と中国-----臼井勝美
日米関係における中国要因-----ウォレン・ コ ーエン
太平洋戦争と中国-----注　熙
日米開戦とソ連
日米開戦と日ソ関係-----酒井哲哉
「大同盟」の形成と太平洋戦争の開幕-----ウォルドー ハインリックス
太平洋戦争・ スターリンの決断----- コンスタンチン・ Ｖ・プレシヤコフ
日米開戦とヨーロッパ
リッベントロツプと第三帝国の政策決定環境-----田嶋信雄
ドイツと真珠湾 日独同盟と太平洋戦争の勃発-----ベルント・ マルティン
イギリスの対日政策とヨーロッパ戦争（ 一九三九--四一年）-----アントニー・ベスト
日米開戦と英帝国圏

太平洋英帝国圏の対日戦争への道-----塩崎弘明
イギリス・太平洋・世界的宥和----ディヴィッド・ レイノルズ
太平洋戦争と英帝国-----イァン・ ニッシュ

戦争の衝撃と遺産

日本と日本帝国圏
太平洋戦争と日本社会の変貌----- 中村隆英
太平洋戦の日本経済への影響-----W・ マイルズ・フレツチャー
日中戦争・太平洋戦争期の日本の植民地帝国-----マーク・ R・ ピー ティ
太平洋戦争の衝撃と遺産還産:韓国の場合-----李盛煥
中国と東南アジア
抗日戦争の遺産-----陳絳
日中全面戦争の衝撃：中国の国民統合と社会構造-----石島紀之
日本のインドネシア支配の遺産-----後藤乾一
日本のフィリピン占領の遺産-----リカルド・T・ ホセ

戦争の意味

日米関係と太平洋戦争
日米関係における太平洋戦争-----有賀　貞
二〇世紀と太平洋戦争の意味----- アーネスト・ R・ メイ
太平洋戦争の「争点」と「目的」----- 北岡伸一
〔パネルディスカッション〕**日米関係と太平洋戦争**
二〇世紀と太平洋戦争
二〇世紀における太平洋戦争の意味----- マリウス・B・ジャンセン
二〇世紀の戦争とその意味-----五百旗頭真
太平洋戦争の「教訓」-----入江　昭
〔パネルディスカッション〕**二〇世紀と太平洋戦争**
総括------アーネスト・R・メイ

上記北岡伸一、五百旗頭真　両氏の論説を再録する。(赤枠をクリックされたい)
北岡 伸一（きたおか しんいち、1948 年（昭和 23 年）4 月 20 日 - ）現国際大学学長
五百籏頭 真（いおきべ まこと、1943 年（昭和 18 年）12 月 16 日 - ）現防衛大学校長
の両氏は、その後政府の政策立案に強くかかわっていくようになる。
両氏は、それまで主流だった自虐史観、唯物史観を打破し、中韓の賛意は得られないとしても
その他の諸国から広く賛意は得られそうな史観を確立させたとして良いと思う。
この事は我国の外交戦略構築の為にも渇望されていて、この後政府は両氏を重用して行く事になる。

五百籏頭は、2011 年（平成 23 年）4 月に創設された東日本大震災復興構想会議議長、
2012 年（平成 24 年）2 月に創設された復興推進委員会委員長を務める。
北岡は、2013 年、第 2 次安倍内閣で「安全保障の法的基盤の再構築に関する懇談会」座長。
2015 年　戦後７０年談話の有識者会議　副座長、座長は中国を含む諸国に顔の立つ西室泰三氏を
充てたが、議論の筋道は北岡の持論に依ったものと理解される。

２．北一輝関係

④松本 健一著『評伝　北一輝』全５巻

岩波書店　2004 年１月～9 月発行

評伝　北一輝　１　若き北一輝　281ｐ
評伝　北一輝　２　明治国体論に抗して　296ｐ
評伝　北一輝　３　中国ナショナリズムのただなかへ　306ｐ
評伝　北一輝　４　二・二六事件へ　345ｐ
評伝　北一輝　５　北一輝伝説　293ｐ

松本 健一（まつもと けんいち、1946 年 1 月 22 日 – 2014 年 11 月 27 日）

中西寛（京都大学教授＝国際政治学）による書評を掲げる事とする。

『近代日本について数々の独創的な研究を公表する一方で、現代の様々な知的課題に対しても鋭い問題提起を行ってきた著者にとって、北一輝の研究は出発点であり、常に立ち戻る原点でもあった。その膨大な研究成果がこの度、全五巻の評伝として完成した。全身全霊が傾注された熱気が行間から立ちのぼる、掛け値なしの力作である。

本書が描き出す北一輝の五十四年の生涯は鮮烈の一語に尽きる。明治中期に佐渡に生まれ、上京して二十三歳の若さで『国体論及び純正社会主義』を自費出版するが、即座に発禁の憂き目にあう。北は逃れるように中国に行き、中国革命に関与する。この時書いた著述は後に『支那革命外史』として出版される。しかし第一次世界大戦後、ウィルソン外交と朝鮮、中国での反日運動を眺めつつ、日本の国内改造に関心を移して『日本改造法案大綱』を著す。

その後日本に戻った北は、大川周明らが結成した国内改造をめざす結社、猶存社に参加し、世を憂う下級士官との接触が始まる。猶存社は解散するが、北は政党政治の腐敗と財閥支配を糾弾する立場から政治の裏面で暗躍した。しかし次第に法華経への傾倒を強め、政治活動からは遠ざかった。にもかかわらず、二・二六事件に連座して一九三七年、銃殺刑に処せられた。

迫害を受けながらも北の思想は板垣退助、河上肇から岸信介、三島由紀夫までに強い印象を与えてきた。かねて著者は「革命的ロマン主義者」として北を解釈してきた。かつてそれは「革命は左翼、ナショナリズムは右翼」というドグマに対するアンチ･テーゼとして打ち出された。しかし本書での北はロマン主義者として、豊かでふくらみを持つ存在となった。

鎌倉時代に順徳天皇と日蓮が流された記憶の残る地で、自由民権の息吹と本土との経済交流による変化を感じ、眼疾による学業と恋の挫折を経験した生い立ちが、万世一系説に基づく天皇観を否定し、国民革命によって社会主義を実現するという、明治にあっては稀有（けう）の視角を可能にした。下級軍人を改造の担い手といち早く認識し、中国をめぐるアメリカとの角逐の危険性を察知、その回避に努めるという透徹したリアリズムをもちながら、中国革命家の遺児を養子として慈しみ、二・二六事件の首謀者たちの意気に感じて死を受け入れる情の篤（あつ）さが、独特のカリスマ性を生んだのであろう。

本書は二十世紀の北一輝論、革命家としての北像の完成型と呼べよう。しかし本書は、北の思想が、ロマン主義とテロの関係や、日本とアジアの連帯と相克など、二十一世紀的視点から解明されるべき巨大な問いをはらんでいることも示した。
本書を新たな出発点として、二十一世紀的な北一輝像を描く研究が登場することを期待したい。』

３．日本美術関係

⑤矢代幸雄　「日本美術の特質」第２版　岩波書店　1965 年発行

本文 754 頁　図録 228 頁

矢代 幸雄（やしろ ゆきお、1890 年 11 月 5 日 - 1975 年 5 月 25 日）は、日本の美術史家、美術評論家である。

日本における西洋美術史研究の祖であると同時に、滞欧歴が長く海外の知己も多いコスモポリタンとしての立場から、日本美術の紹介と国際的認知にも努めた。戦後には、日本を世界の中の「文化国家」にしようという使命感のもと、美術・文化財にまつわる制度整備にも尽力している。

アメリカ人東洋美術史家、ラングドン・ウォーナーの友人であった矢代は、第二次世界大戦時に米軍が京都・奈良に空襲を行わなかったのは、日本の古都の文化的価値を尊重したからであるという、いわゆる「ウォーナー伝説」を作り出した人物でもある。この伝説は米軍資料やウォーナー自身により否定されているが、観光都市・京都のイメージ作りに大いに利用された。(ウィキペディア)

本書初版の「序」の一節に著者の意気込みを感ずる事が出来るので再録する。

(前略)

斯くして本書は日本美術の殆ど有らゆる分野を網羅し、それ等に通ずる全体的理論を索め、その本質を極めんとする一の体系を成すに到った。 是は実に容易ならざる学業にして、余の如き、この広範囲に関する史的乃至技術的知識大いに足らず、またそれ等を消化渾成して論理的建設をなすに、思考力未だ充分に精錬されず、本書の如きも竟に余一個の無謀なる試論に過ぎざるを深く愧づるのである。

然しながら翻って思へば、日本の美術史界も既に相当に発達して来た のであるから、最早用意を整へた綜合論的研究が現はれてもよいのではないか。 近年日本の美術史家は殆ど史料捜査に専念し、またその方面の貢献も大きいが、史料捜査が美術研究の総てでないこと、言ふまでもない。

史的或は技術的なる確実なる根拠を押へて居ない綜合論は、浮薄幼稚なる空論たるを免れず、その種の空論の書は世に乏しくはないが、史料捜査によって部分的に固められて行く専門学の進歩に伴って、同時に綜合的観察の行はれて居ないことは、日本の美術研究に大局の洞察を失はしむる憂があると思はれる。 否、そればかりではない。 美術の美術たる所以は、その心霊に徹し情緒に訴へ人生を鼓舞する点に在る。 単に失はれたる過去の知識を捜し出して之を史的に配列すれば済むだけの 学問ではない。

苟も美術が斯くの如き性質たる以上、美術に関する綜合的観察をなすに非ざれば、その本質は理解されず、真価も妙味も亦た感得される筈はない。 余の猪勇に成るところの本書が、現在あまりに欠けて居る美術の全般的研究に或る刺戟と示唆とを与へ、それによって日本美術に対する愛と純情とを養ひ得るならば、それは余にとって望外の歓びである。

(後略)

４．上記著作と拙論『仏説大東亜戦争』の関係

北一輝の生涯を日本に革命を期して行った捨身供養と捉えた安岡正篤の碑文がヒントになって、大東亜戦争を日本民族が「東亜の解放」を期して行った捨身供養と捉える事が出来ないかと考えたのが、発端である。(北一輝とは何者かは④)

「東亜の解放」即ち大東亜共栄圏の建設の実態は②、③に詳しい。

実態は、大東亜共栄圏を我が国の支配下に置きたいと思っていた軍人が多かったのであるが、

民族の深層心理はどうなのか、その当たりが①に詳しい。
そして日本民族が仏教伝来の当初から捨身供養の考えを受け入れていて、ある種の憧れをもつて表現していた「捨身飼虎図」があり、これは日本民族の性情の特筆を表しているとの⑤の記述を見つけ出して一先ず拙論を構築する事が出来たのである。